

龍宮—ひとりを楽しむ—

准教授 大 城 邦 義
(真宗学 宗教教育)

今、私はある大学の図書館にいる。椅子に腰かけ、書架に眼をやる。背表紙から飛び込んでくるタイトルが私の心をくすぐる。見るともなしにただ眺めているだけで、私の中の何かが反応するのだ。書物との出会い、対話はここから始まる。おもむろに書棚に歩み寄り、1冊を手取る。「はじめに」(まえがき)を読む。著者の視座・問題意識がこちらに問いかけてとして伝わってくる場合、その本の目次に目を通す。さらに「あとがき」を読む。著者の略歴紹介を見る。最後にパラパラと本文を拾い読みし、椅子に戻る。借りて帰り、家で読むこともある。(書肆で購入するときも同じである。)

私の記憶は一気に学生時代にさかのぼる。

昭和 46 年 (1971) 4 月、私は大谷大学に入学した。当時の図書館は、今はない。入学当初から、講義の後は図書館によく行った。閲覧室の入り口に各社の新聞が吊って置かれていた。気の向くままに二三の新聞を手にとり、空いた席に座り目を通した。ゆっくりできるひと時であった。

やがて周囲から勧められた本を読むようになった。近角常観先生・暁烏敏先生ほか、『歎異鈔』の解説書など、また自分に読めそうな本、読みたいと思う本を、カードのタイトルを見て借り出し、閲覧室で読んだ。(当時は完全閉架式であった。) 閲覧室は夕方 6 時になると、係の人が閉めに来た。カーテンを引く音が暗黙のサインであった。今でもその情景は鮮明である。6 時まで居る人はまばらで



あった。藤秀翠先生の『歎異鈔講讀』に出会えたことも懐かしく思い出される。

3 回生になり、専攻が決定すると、いろいろ調べる必要が出て来て、閲覧室に隣接している「辞書コーナー」を頻繁に利用するようになった。大きな辞書が設置されていて便利であった。また閲覧室には 2 階があり、スタンド付きの大きな個人机があった。机と机の間隔もしっかり取られており、ひとり集中するには最適であった。しかし、使用は 6 時までであった。中断しなければならぬことに疑問を感じた私は、ある先生に「大学の図書館なのになぜ 6 時で閉まるんですか。もうちょっと開けてもらえませんか」と言いに行った。帰ってきた言葉は「開けていても学生は勉強しないからね…」であった。

4 回生になると、研究室の利用の方が頻繁になり、居場所は図書館と半々くらいになった。研究室には『大正新脩大藏経』と『国訳一切経』があり、何かと役に立った。

大学院に進み、同時に家族をもった私は、一気に身辺が慌ただしくなり、図書館でゆっくりする時間はほとんど無くなった。しかし、

本との縁は別途展開し深まっていった。院で出合った畏友から「本は買って読むもの。家は借りて住めばよい」という金言を聞いたのである。また院を終えるとき、先生から「もっと勉強したいか」と聞かれた私は、二つ返事で答えると、研究員というポジションを与えられた。購入した本を家で読むようになり図書館の利用は少なくなった。助手となって幼児教育科に配属され、一般研究室に身を置くことになった私は、またさまざまな分野の書物と出会うこととなった。教育学・哲学・心理学・社会学・児童文学・自然科学・美術・音楽・体育等の書物が私を迎えてくれた。しかし、根源的に「浄土の真宗」に深く入り込んでしまっていた私の魂に響いてくる書物は少なかった。学生を通して新見南吉・小川未明・宮沢賢治等の作品に再び出会うことを得、やがて倉橋惣三先生を知るようになった。

学生時代から古書店に立ち寄るのが好きであった私は、仏教(真宗)以外の書籍にとどまらず、他の本も買った。「本は買って読むもの。家は借りて住むもの」という友の言葉は、いつの間にか本を買うことへの自己正当化となり、今や家には本があふれ、家族から苦言を受けるようになってしまった。「広い部屋を狭くしてまで本を置く必要があるの? 本末転倒じゃないの。思い切って処分して」と何度も家人から言われている。

しかし、本は1回読んだだけでは、すべてを消化できない。「ごめん。本は何度読んでも新しいことに気づかされ、教えられるんだ。本の背表紙を見ているだけでもふっと大事なことに気づかされ、考えるヒントを得ることもあるんだ。ちょっと待ってくれ」と懇願しているのである。学生時代に買って長く書架に眠っていた本に、今驚きをもって蒙を開か

れ、座右においているものもある。以前1回読んだだけでわかったつもりになっていた本でも、今あらためて深く頷かされている本もある。しかし家人はさらに言う。「何度も読み返す必要のある本で、そんなにたくさんあるの?」そうである。まさにそのとおりなのである。確かにそう頷かざるを得ない私は、ひとり『真宗聖典』1冊があれば…とつぶやく。しかしその1冊をいただき続けるためにはまたいろいろなものが必要になるのである。

大谷大学は親鸞の大学であり、背後には法然がおり、さらに八万四千の法門がある。もっと言えば全世界がある。84万有余の蔵書はそのことを語りかけている。

当たり前のことであるが、本は読まれるためにあり、本を読むためには「暇」が必要である。誰にも何にも干渉されない時空間(場)が必要なのだ。それを与えてくれるのが実に図書館なのである。

しかし、親鸞は言う。

「末法五濁の有情の

行証かなわぬときなれば

釈迦の遺法ことごとく

龍宮にいりたまいにき」(『正像末法和讃』)

日ごとに急速にデジタル化が席捲してきている中で、書籍はますます様相を変えつつある。私は「無人空廬(曠)の沢」に佇んで龍宮を見つめている。